

# 「エダマメ日本一」を訪問

## 青果育種研究会 秋田の在来品種で差別化



活発な意見が交わされたパネルディスカッション

青果育種研究会（岩澤均会長）は9月15、16の2日間、エダマメの在来種でブランド化を図り、昨年念願の「エダマメ日本一」を達成した秋田県を訪問、行政、JAグル

ープ、農家が一体となって産地化を推進している現場を見学、シンポジウムなどを通して日本一達成への軌跡をたどった。人口減少と高齢化は日本中のほとんどの自治体が抱える問題。特に秋田県は

年にオール秋田体制のえだまめ販売戦略会議が発足、エダマメ日本一への挑戦が始まった。昨年の東京都中央卸売市場での

都道府県別エダマメ出荷量で、秋田は初の日本一を達成した。

市場、種苗、行政など関係者一行は15日に秋田入りし、JAあきた湖東エダマメ選果場、農事組合法人ファーム夢未来（土橋次男代表理事）、農事組合法人つかまファーム（伊藤高代表理事）を訪問した後、秋田ビューホテルでシンポジウムと懇親会を開いた。16日は谷美主幹、県農業試験場農事組合法人白華の郷、秋田県農業試験場、JA新あきた選果場、農事組合法人平沢ファームなど

で、水田の多角的活用に必要な灌漑施設の整備や収穫の機械化、良品選別などでの雇用拡大など、精力的にエダマメの生産現場を見て回った。

シンポジウムは県農林水産部園芸振興課の川原の佐藤友博上席研究員が、県園芸作物振興やオリジナル品種開発の経緯について基調講演をした

TPPを含め、農業のグローバル化に伴い、玉米中心の農業が成り立たなくなってきたという現状の中で、水田の多角的な活用が課題になってい

た。平成22（2010）



後、パネルディスカッションが開かれた。

えだまめ販売戦略会議会長の武藤隆繁・全農秋田園芸畜産部次長は会長職を受ける際に「目標を明確化する、縦割り連携ではなく横一線の実務者組織にする、エダマメを入れるパッケージは統一する」という会の基本的なスタンスの周知徹底に重点を置いてきたことを

強調した。

平成26（2014）年

にエダマメ販売実績1億円を達成したJAあきた湖東の小野義隆農業振興課係長は「生産者所得の向上が農業の活性化には必要。それを実現する手法が育種であったり、流通であったりする。直売所でも量販店でも品種で差別化を図っている。品種のチカラが販売戦略に

なっている」として、オリジナル品種の充実を図るとともに、種苗メーカーに対して地元にあった品種の供給を要請した。

一方、参加した市場関係者からは、物量を持っているところが価格主導権を握る、地方市場からは受け入れキャパシティは十分、と今後の販路拡大路線にエールを送っていた。

